



Title	野生生物管理の民族誌にむけて : ポール・ナダスディ 著 『獵師と官僚』を読む
Author(s)	近藤, 祉秋
Citation	早稲田大学文学学術院文化人類学年報, 10, 13-19
Issue Date	2015-12
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/75643">http://hdl.handle.net/2115/75643</a>
Type	article
File Information	Toward_an_Ethnography_of_Wildlife_Management.pdf



[Instructions for use](#)

---

# 野生生物管理の民族誌にむけて

## —ポール・ナダスディ著『獵師と官僚』を読む—

近藤 祉秋 (早稲田大学院文学研究科/アラスカ大学フェアバンクス校人類学科博士候補生)

---

### Toward an Ethnography of Wildlife Management: A Review of Paul Nadasdy's *Hunters and Bureaucrats*

Shiaki KONDO

*Ph.D. Candidate, the Graduate School of Letters, Arts and Sciences, Waseda University*

*Ph.D. Candidate, Department of Anthropology, University of Alaska Fairbanks*

#### ABSTRACT

This paper aims to review Paul Nadasdy's *Hunters and Bureaucrats: Power, Knowledge and Aboriginal-State Relations in the Southwest Yukon*. This book details the process of (a failed attempt of) knowledge integration regarding declining Dall Sheep populations in the Ruby Range. Nadasdy's work combines a solid ethnographic description of Athabaskan-speaking Kluane people with a refined analysis based on STS and political ecological perspectives. Against the popularity of co-management projects and "success stories" of knowledge integration, Nadasdy offers critical perspectives toward TEK regime in the Yukon Territory. His argument is that TEK regime actually disempowers indigenous peoples due to "compartmentalization" and "distilment" of their lived experiences. Knowledge integration means, he argues, TEK is modified in such a way that is useful to wildlife scientists and natural resource managers. Even when the estimation of present situations differed between Native and non-Native stakeholders because of their different worldviews, co-management regime was not prepared to make sure that such different epistemologies and ontologies were properly represented and, more importantly, acted upon.

#### 1. はじめに

2010年ごろから、アメリカ合衆国アラスカ州ではマスノスケ（キングサーモン）の記録的不漁が大きな社会問題となっている。アラスカ州の野生生物管理をおこなう漁撈・狩猟局（Alaska Department of Fish and Game）は、ユーコン川流域やクスコクイン川流域において厳しい漁業規制をしいて、マスノスケの減少を食い止めようとしてきた。しかし、アラスカ先住民社会においては、サケ類が重要な食料であるため、その決定に対して不満の声があがることも少なくない。近年のマスノスケ減少問題は、あらためて、野生生物管理をめぐる国家と先住民社会の関係に注目する必要があることを告げていると言えるだろう。

そこで、本稿では、ポール・ナダスディ著『獵師と官僚：ユーコン準州南部における権力・知識・先住民と国家の関係』、UBC Press, 2003年（未邦訳）[Nadasdy 2003]の内容を整理し、アラスカ州における野生生物管理とそれをめぐる先住民と国家の関係を文化人類学的な観点にもとづいて考えるための出発点としたい。『獵師と官僚』は、日本において詳しく紹介されたことはないが、北方アサバスカン民族誌学における画期的な業績とされており、今でも国内外の北方研究者が多く引用している。また、その内容は、北方狩猟民研究にとどまらず、科学技術論（STS）やポリティカル・エコロジーの議論も踏まえたものとなっているため、他地域の研究にとっても興味深いものとなる。以降では、書評論文の形式をとり、『獵師と官僚』を指して、「本書」と呼ぶこととする。

本書は、カナダ・ユーコン準州の先住民と国家の関係に関するモノグラフである。著者のナダスディは、ユーコン準州の州都ホワイトホースから北西に280 kmほど離れた集落バーウォッシュ・ランディングを中心に、1995年から1998年にかけて調査をおこなった。本書はその調査で得られた民族誌データと文献調査をもとにしている。

本書では、カナダ先住民と国家の関係において重要な「共同管理」(co-management)と「土地権益請求」(land

claim) を扱っている。とくに第3章から第5章にかけて、集中的に「共同管理」の理論的考察と事例研究が試みられていることから、本書評では「共同管理」の研究として本書を位置づけたい。共同管理とは、自然資源（本書では野生動物）をより効果的に保全し、持続的な利用を可能とするため、これまで政策決定の過程から排除されてきた利害関係者を参加させようとする試みであると考えられることができる。とくに先住民が関わる場合、彼らのもつ見解が「伝統的な生態学的知識」(traditional ecological knowledge 以下 TEK と表記) として特別に扱われる場合もある。TEK を自然資源管理に役立てようとする動きを肯定的に捉える論者も多い[Haruyama 2002; Sillitoe 1998]が、文化人類学では批判的な視座も含めながら慎重に検討する論者も散見される [大村 2002; Briggs and Sharp 2004]。その中で本書は実際に共同管理の会合に同席し、先住民側のみならず、国家側の担当者の言動、思惑などについても考察し、その過程における微細なやり取りに着目した点が斬新である。

## 2. 本書の概要

序論において、本書の議論に関する簡単な見通し、依拠する理論、調査地の概況、ナダスディがおこなった調査の経緯などが示される。まず、ナダスディは、カナダにおける先住民の土地権益請求や共同管理が先住民のエンパワメントを目指しているながら、現実には正反対の影響も与えかねないことを指摘する。この点をフィールドワークと文献資料をもとに例証することが、本書の大きな目的である。

しかし、国家とその領域内の先住民との関係を考えるときに、依存の強要と搾取をもたらす植民地主義的支配としてのみ、両者の関係を描くことでは不十分だという。第1の理由として、大きな社会変動にも関わらず、カナダ先住民は独自の文化を保持することに成功していることが指摘される。第2の理由として、植民地主義的支配という単純な筋書きでは、国家の複雑な性質を捉え損なってしまう。つまり、国家はひとつの意思に導かれた統一体と呼ぶには程遠い存在であり、(時に相克する) 国家の諸代理人が先住民と交渉をもつ過程に着目することが、現状を正しく捉える上で必須となる。

この過程を描写するための手がかりとして、ナダスディは、ピエール・ブルデューの象徴資本論、マックス・ウェーバーの官僚制に関する考察、ミシェル・フーコーの「権力／知」概念を引きあいに出し、先住民の官僚化を論じる。土地権益請求や共同管理に有効に関わるために、先住民側は地方政府の官僚や科学者らの言説を学ばなくてはならず、また、自ら官僚制に基づいて、物事を処理する必要性が生じた。こうした国家の実践が先住民の慣例と衝突するとき、知と権力の問題が前景化する。つまり、土地権益請求や共同管理の交渉過程は、国家の枠組みに先住民の知識や実践を押し込める過程となってしまうっており、先住民のエンパワメントどころか、先住民の慣例を抑圧して、国家の権力を伸長する結果をもたらしている。

序論での問題提起を受けて、第1章ではユーコン南西部の先住民と国家（実際には、教会や毛皮交易商など、主流社会の成員も登場する）の交渉史をひもとく。もともと、遊動生活を送っていたこの地域の先住民が、狩猟や漁労を主な生業とするほか、沿岸や内陸に住む他の先住民集団と交易をおこなっていたことが紹介される。ユーコン南西部における毛皮交易も、当初は先住民間の交易ルートに基づく形でおこなわれていた。だが、19世紀末に入植者が交易所を付近に建設したり、1898年にクロンダイク・ゴールドラッシュ (Klondike Goldrush) が起きたりすることによって、次第に入植者の介入が増えてくる。

この動きをさらに加速させたのが、第二次世界大戦中に日本軍の侵入を防ぐことを目的としておこなわれたアラスカ高速道路の建設 (1942年) である。欧米系入植者との交渉が増えた結果による伝染病の蔓延で、先住民が打撃を受けたこと以外にも、高速道路建設に従事する軍人と民間人による狩猟過多で食料供給が悪化した。

高速道路建設に伴う影響は、より長期的な側面もあった。狩猟過多から地域の野生生物を守るため、1943年にはクアネ禁猟地域 (後のクアネ国立公園) が指定され、(先住民を含む) すべての狩猟、罠かけが禁止される。現在では、先住民によるこの区域での狩猟は許可されている。また、この時期に宣教師の活動があり、伝道学校 (1951年～60年代半ば) での虐待や差別の問題も起こっていた。

ユーコン準州に住む先住民の (現在の体制につながる) 土地権益請求は、上述した混乱のさなか、1973年に始まっ

た。世界大戦や伝道学校の経験を経て、政治的に団結する力を備えた先住民は、土地や資源へのアクセスや無制限な開発の抑制を求めた。交渉は20年続き、ようやく、1993年にはユーコン包括的最終協定（Yukon Umbrella Final Agreement, 以下UFAと表記）が結ばれる。以降、その協定の枠組み内で、準州内にある14の先住民政府が個別に政府（準州政府、および中央政府）と協定を結ぶことになった。

第2章では、クアアネの人々が現在、どのように生活を送っているかを描く。まず、ナダスディは、クアアネの人々にとって、現在でも狩猟が生活の重要な部分を占めていることを指摘する。しかも、狩猟を娯楽として捉えがちな主流社会の成員とは異なり、クアアネの人々にとって、狩猟は「生き方」である。野生動物の肉は、「インディアンの食べ物」として高い価値を与えられ、それを食することは、先住民であることを確認する機会ともなっている。

クアアネの人々にとって、野生動物は敬意をもって付き合わなければならない「人間以外のパーソン」(other-than-human persons) である。人間と動物の関係は、互酬性の原理によって規定されている。そのため、動物を馬鹿にしたり、もてあそんだりしてはいけぬ。動物の遺骸を適切に処置すること、肉を食べ残さないこと、食物禁忌などの決まりも守らなければならない。そうしなければ、動物は狩猟者のもとにやっとなってなくなってしまう。

クアアネの人々を含む北方アサバスカンにとって、真の知識とは、実体験（寝ているときに見る夢での経験も含む）に基づくものである。若者が狩猟や裁縫などを学ぶ際にも、実際にやってみせて、その後自分でやらせてみて学ばせることに重きが置かれる。もちろん、古老や熟練のハンターが語る物語や体験談も重要な知識の源泉ではあるが、究極的には個々人が実体験によって学びとるものとされる。

以降の章で、ナダスディは共同管理や土地権益請求における先住民と国家の交渉過程を扱っている。第3章においては、「知識の統合」という発想自体を批判的に検討する。この章は、以降の章のための理論的根拠を示すものと考えられる。UFAの締結以来、ユーコン準州でもTEKと科学を統合しようとする試み、つまり共同管理が盛んになっている。もちろん、こうした統合が簡単ではないことは、当事者たちも理解しており、公式には技術的、認識論的問題として説明される。だが、同時に非公式的な場では、政治的な問題として考えられている。ナダスディも、政治的問題、つまり、知識とその正統性をめぐる権力の問題として共同管理を扱うことを提案する。

そもそも、「伝統的な」「生態学的」「知識」というTEKの3つの構成要素すべてに隠れた（西洋中心主義的）前提があるとナダスディは説明する。「伝統的な」という言葉遣いは、最近の狩猟実践を、先住民文化が近代化によって失われた例として見なしかねない危険を孕んでいる。「生態学的」という言葉遣いは、自然（動物や土地）が人間とは異なった地位にあることを示唆している。狩猟は「知識」というよりも、生き方であるという先住民の考えも反映されていない。

ここでナダスディはTEKの「区画化」(compartmentalization)、「蒸留」(distilment)という概念を提案する。「区画化」は、西洋的な意味での「知識」に不可避な分類（社会科学、自然科学）を施す作用を指す。「蒸留」は、その分類にしたがう形で、先住民の生活経験から（科学者や官僚にとって）有用なものを取り出す作用を意味する。現在の共同管理はこれらの作用を通して、TEKを科学に挿入する形でおこなわれているため、交渉の過程のなかで、先住民の生活経験は歪曲されてしまっている。TEKの「区画化」と「蒸留」は、先住民の生活経験を「科学的」資源管理のネットワークに組み入れるための作用であり、善意に基づくものであっても、「計算の中心」（準州政府や政府に雇われた科学者の研究室）の権力を増す方向に進まざるをえない。もし、本当に共同管理を通して先住民のエンパワーメントを望むならば、TEKの「区画化」と「蒸留」は問題視されなければならない。

第4章および第5章では、第3章でなされた理論的検討をもとに共同管理の事例研究をおこなう。ナダスディが扱うのは、1995年にクアアネ・ファーストネーションとユーコン準州が共同で設立した「ルビー・レンジに生息するヒツジに関する諮問委員会」(the Ruby Range Sheep Steering Committee) である。この諮問委員会は、この地域におけるドルシープの個体数が減少していることに危機感を抱いたクアアネ側の訴えによって設立された。

参加者は先住民代表（クアアネ・ファーストネーションと近隣の者たち）、準州政府の再生可能資源管理局、国のインディアン問題と北方開発局、国立公園関係者、地元の環境保護団体、地元の狩猟ガイド業者である。彼らとともに、野生生物管理のための勧告をまとめ、準州に提出することになっている。

ここで問題となっているドルシープは、先住民にとって、貴重な食料源である。また、非-先住民の狩猟者にとっ

ては狩猟記念物として高い価値を有している。そのため、他所から来る狩猟者の狩猟ガイドを務める狩猟ガイド業者は、ドルシープを貴重な収入源とみなしている。こうした事情のゆえに、ドルシープの狩猟には制限が設けられている。そのひとつが「十分に角が成長した雄のみ、狩猟の対象としてよい」という規則である。なお、先住民の狩猟者には、この規則が適用されない(1991年のカナダ最高裁判決から)。

諮問委員会の参加者は、以前よりドルシープの個体数が減ってしまったことについては、認識を同じくしていた。しかし、それ以外の点に関しては、諮問委員会の見解はばらばらであった。先住民側は、古老や熟練の狩猟者の回想をもとに、個体数減少は長期的な傾向であり、しかもかなり深刻であると捉えていた。ゆえに、狩猟に新たな制限が必要だと考えている。国立公園などに勤務する科学者は、(彼らにとって)信頼できるデータが限定されているため、個体数に影響する変数を厳密に調整した慎重な調査が必要だと主張する。狩猟ガイド業者は、科学者に近い見解をもっていた。個体数減少は天候の影響などの短期的なものであり、新たな制限を設けるほどではないことを強調する。

多様なアクターが自らの利害や見解を交渉のテーブルに持ち込むため、議論はなかなかまとまらない<sup>1)</sup>。それでも、この諮問委員会にも知識統合の成功例が見られる。「行方不明の羊100頭」の話がそれである。1996年7月に準州政府関係の科学者が上空からの個体数計測調査をおこなったとき、ドルシープが前年比で147頭(全頭数の26パーセント)減少したという結果が出た。しかし、同年秋の猟期に狩猟ガイド業者のもとで働く狩猟ガイドが地上から個体数の計測をしたところ、通常より100頭ほど多く計測した。これらの情報をもとに、上空からの調査が例年より1ヶ月遅かったこともあって、科学者と狩猟ガイド業者は、7月には他所に移動していた群れが猟期には戻ってきたと結論づけた。両者ともに個体数に関する見解が似ており、しかも、自然科学の調査法に慣れていたので、こうした統合が可能だったとナダスディは説明する。

他方で、先住民と科学者の知識統合は難航する<sup>2)</sup>。そこで、共同調査をおこない、ドルシープの個体数について共通の認識を作ろうとする試みがなされる。1996年4月半ばのある日、準州政府の科学者とクルアネ・ファーストネーションの成員が共同で地上調査をおこなった。目的は、生まれてから1年以上生存した子羊と全体の個体数を計測することによって、子羊の生存率や群れにおいて若い個体が占める割合を標本調査することであった。両者は協力して、約45個体を数えた。しかし、先住民側は1日を調査に費やしてもこの程度の個体数しか、発見できなかったことが事態の深刻さを物語っているとしたのに対し、科学者側はこの標本数では全体の頭数に関して統計的に有意な結論を引き出すことはできないと結論づけた。共同調査は共通のデータを生み出したが、現状認識や信頼できる知識を生産する手続きの違いに基づく解釈の違いによって、相互不信がよけいに強まってしまった。

そもそも、彼らが実施した「共同調査」はすべて、科学者がおこなう調査に先住民を参加させるという形でおこなわれている。真の知識はブッシュでの個人的経験から生まれるという考えを背景に、先住民側は科学者に彼らの狩猟に同行してみることを強く奨めるが実現しない。なぜなら、科学者にとって、狩猟に同行して得られる知識は、「科学的」(ここでは「統計的」くらいの意味)ではないからだ。しかも、ドルシープの経済的重要性を考えると、狩猟の規制をそのままにさせることに利益がある者が別の科学者を雇い、政府の科学者の研究が攻撃されてしまう可能性さえある。

第4章、第5章では、複数の知識体系を統合することによって、先住民のエンパワーメントを図り、利害関係者間の連携を推進するはずの共同管理が、参加者の善意にも関わらず、ドルシープをめぐる知識の政治に回収されていってしまうことで一層の相互不信を招いている姿が示されていた。つまり、先住民側は科学者が地元で有力な狩猟ガイド業者の肩を持っていると感じ、諮問委員会の活動に失望する一方で、科学者側は先住民の主張をそのまま受け取ることができない状況にある。たとえ、先住民の主張を科学者が信じたとしても、彼らの考えに基づいた調査を「科学」の枠組み内で実践することはできないのだ。

第6章は、クルアネ・ファーストネーションの土地権益請求を事例として扱う。ナダスディが目にするのは、極北の先住民が「不動産/所有物」(property)として土地を捉えていたかどうかに関する政府や人類学者の議論である。基本的には政府は先住民が「不動産/所有物」として土地を捉えていなかったという立場をとった。しかし、そのような見解がもつ政治的含意を考慮に入れて、人類学者は「不動産/所有物」概念を拡張させること(家族の狩猟

縄張りなど)で、彼らも「不動産/所有物」に準じた考えを持っていたと論じてきた。

しかし、ナダスディが主張するには、先住民と土地の関係を「不動産/所有物」として描くこと自体を問題視するべきである。クルアネの首長であった情報提供者は、1970年代に土地権益請求の一環として、クルアネ・ファーストネーションの「所有地」の範囲を定めるため、ブッシュを歩きまわっていたことを回想する。あるとき、彼に同行した祖母は、「土地権益請求」とは誰がどの土地を所有するかではなく、入植者と先住民が協力して土地や動物との関係を次世代に伝えていくための会議だと思っていたと失望をあらわにしたという。つまり、土地権益請求もまた、共同管理と同じく、先住民の考えや実践を入植者たちの土地観に沿う形で「区画化」し、「蒸留」する作用をもっていると言える。

しかも、土地権益請求の結果、先住民政府に勤める者たちは狩猟の機会をかなり奪われてしまった。先住民政府での仕事が共同体内でのほとんど唯一の常勤職だということもあって、経済的格差が生まれつつある。そのような状況を目の当たりにして、土地権益請求の推進派である情報提供者でさえも、それが先住民全体にとって、本当に良い結果をもたらすのか不安になってきたと語る。

### 3. 本書の意義

本書を通読して、まず思うのはナダスディが描く先住民や国家（政府）の代理人の姿が多様であることだ。クルアネの人々は、先行研究で言及されていたような狩猟呪術を用いることもないようであるし、先住民政府で働く官僚のなかには、「事務仕事ばかりしていて、自分も気晴らしにピクニックに行く白人の気持ちがわかるようになった」とナダスディに漏らすものもある [Nadasdy 2003: 253]。しかし、それでも主流社会に同化しきってしまうどころか、独特の生活を維持し続けている先住民の生活を、彼ら自身に内在する多様な視点を考慮に入れながら描いた点に本書の価値は認められる。

また、本書はカナダ先住民の民族誌学と科学人類学の折衷を図ったものとして読むことができる（そもそも、両者を文化人類学における独立した下位分野として扱ってきた私たち自身こそ、「区画化」のとりこであると言えるかもしれない）。少なくとも、本書で試みられた人類学的な「知識統合」は、本文中で批判の対象となった共同管理の「知識統合」にまつわる陥穽をまぬがれているように思う。つまり、カナダ先住民（もしくは極北の先住民一般）に興味がある者が読んでも、彼らが蒙った社会変動とそのさなかで生きる彼らの生活を垣間見ることができる。科学人類学に興味がある者にとっては、科学研究にまつわる多様なアクター間の交渉過程に着目するべきだろう。地域で有力な狩猟ガイド業者と生活を守ろうとする先住民の板挟みになりながら、葛藤のさなかで研究を続ける科学者の姿がちらほら窺える [Nadasdy 2003: 207]。序論でナダスディ自身も述べているように、「国家による先住民の抑圧/同化」という単純な筋書きを繰り返すだけで満足しなかったことが本書の議論に深みを与えている。

本稿では、本文の概要を紹介することに紙幅を割き、とくに後半の章に関しては印象的なものに限って、事例さえ示すように努めた。本書の価値は、多様なアクターが様々に交渉をもつ「遭遇」[cf. Blaser 2009]の場において生起する微細な（しかし、根本的に重要な）ずれを明らかにしたことにある。それゆえ、本書を紹介するにあたって、その事例を引くことが最も有効であり、不可欠であると考えたからであった。

### 4. 本書の課題

本書の価値が微細なずれに着目する民族誌家の観察眼にあるとしたら、本書の課題は理論的側面に求められる。課題の1つとして、共同管理、土地権益請求のありかたについて積極的な提示がないことが、まず挙げられる。ナダスディ自身も、草稿の読者数名から同様のことを指摘されたことと本書の結論部で認めている [Nadasdy 2003: 268]。この批判に関して、共同管理における相互不信は、そもそも行政や政策、科学研究などの主流社会側の構造自体に起因するものであり、ナダスディ自身の提言（たとえば、科学者ではなく、先住民が共同管理における調査の枠組みを決めるべきであるというもの）が建設的なものとして理解されないこと自体が問題であると反論している。確

かにそうかもしれない。しかし、評者は彼の答えに不満を感じる。というのも、ナダスディはある重要な利害関係者に関して多くを語らないからだ。もしかしたら、その利害関係者についてより詳細に調査すれば、本書が提示しなかったとされる積極的な解決策に結びつくかもしれない。

問題の利害関係者は、狩猟ガイド業者である。もちろん、ナダスディは随所で狩猟ガイド業者について述べている [Nadasdy 2003: 155-156, 178-179]。彼らはユーコン準州においてエリート階層に属し、同業者が組織するロビー団体は強い影響力を持っている。準州の議会にも、元狩猟ガイド業者を送り込んでいる。しかし、第4章、第5章でなされた交渉過程の描写において、狩猟ガイド業者は、科学者の陰に隠れてしまっている印象を受ける。本書の情報 [Nadasdy 2003: 283 の脚注 14] のみを頼りにうがった見方をすれば、科学者という「知の番人」を操ろうとして、先住民と狩猟ガイド業者が舞台裏で火花を散らしている姿を容易に想像してしまう。

しかし、事情はそう単純ではない。彼が事例で取り上げた共同管理の会合には、3人の狩猟ガイド業者が関与していた。2人は、ルビー・レンジ内の狩猟区画でガイド業をおこなっていたから参加するのが当然だとしても、もう1人は自分の商売をする上でこの地域のドールシープに関して直接利害関係を有しているわけではない。もう1人の狩猟ガイド業者は、クルアネ・ファーストネーションの一員であり、諮問委員会における先住民代表の親戚であったのだ [Nadasdy 2003: 156]。

この点を考慮に入れば、狩猟ガイド業者対先住民という構図を採るのも適切でない。クルアネ側も、親戚の狩猟ガイド業者を通じて、より多くの支援をあてにすることができたのではないだろうか。しかし、ナダスディは、その狩猟ガイド業者が交渉の場で具体的にどのような言動をしたかをほとんど述べていない。その人物を含む狩猟ガイド業者たちがいかに共同管理の場において行動したか（またはしなかったか）を明らかにすることで、共同管理に関してより詳細な提言をすることができるようになるのではないだろうか。

そもそも、ナダスディが依拠したフーコーの「権力」概念は、「国家権力」という言葉がもつマクロへの焦点化作用を批判して、より知識生産にまつわるミクロな場への注目を求めるものではなかったのか [フーコー 2006: 420]。もちろん、ナダスディは共同管理における多様なアクター間の交渉を描くことで、フーコー的な意味での「権力」を描いていると考えることができる。しかし、本書の副題に「先住民と国家の関係」とある通り、分析の中心は、先住民と準州政府に属する科学者のやり取りであるように見受けられる。序論で「国家による先住民の同化」という単純な筋書きを保留したのであればこそ、こうした潜在的な「ミドルマン」[cf. 立川 2002] の活動にとりわけ紙幅を費やすべきだったのではないだろうか。

## 註

- 1) 議論がまとまらない理由の一つとして、この諮問委員会の決議は、全会一致によってなされることも挙げられる。
- 2) たとえば、共同管理の会合において、科学者はドールシープの個体数減少の理由を天候不順によるものだと説明しているのに対し、先住民はその説明を自らの経験に照らして、馬鹿げた説明だと見なしている。ただし、自動車や飛行機によって、ドールシープが驚かされて、急峻な山道を逃げる途中に怪我をする可能性などに関して、科学者と先住民の意見は一致しているなど、必ずしも、両者が対立ばかりしているわけではない。

## 参考文献

大村敬一

2002 「『伝統的な生態学的知識』という名の神話を超えて」『国立民族学博物館研究報告』27(1), 25-120.

立川陽仁

2002 「クワクワクワクウはいかに漁業に参入したか—企業家の誕生、活動と戦略」『文化人類学研究』3, 早稲田文化人類学会, 120-143.

フーコー, ミシェル

2006 『フーコー・コレクション4 権力・監禁』(小林康夫・石田英敬・松浦寿輝訳) 東京: 筑摩書房.

Blaser, Mario

2009 The Threat of the Yrmo: the Political Ontology of a Sustainable Hunting Program. *American Anthropologist* 111 (1), 10–20.

Briggs, John and Joanne Sharp

2004 Indigenous Knowledges and Development: A Postcolonial Caution. *Third World Quarterly* 25 (4), 661–676.

Haruyama, Takako

2002 Traditional Ecological Knowledge: From the Sacred Black Box to the Policy of Local Biodiversity Conservation. *政策科学* 10 (1), 85–96.

Nadasdy, Paul

2003 *Hunters and Bureaucrats: Power, Knowledge, and Aboriginal-State Relations in the Southwest Yukon*, Vancouver: UBC Press.

Sillitoe, Paul

1998 The Development of Indigenous Knowledge: A New Applied Anthropology. *Current Anthropology* 39 (2), 223–252.